村のくらし

芳流（KAORU）

村のくらし

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15411188

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ

原作終了の数年後、ネイル村にて。
2021.6.12ヒュンマオンリーに設置したweb拍手お礼画面より再掲載。

2021.11.3　シリーズ組み換え
2022.10.30　表紙変更

村のくらし

　私の生まれ故郷で彼と暮らすようになって、少しの時間が経った。

　森の中の小さな村での、落ち着いた生活は、これまで政治や軍事の中心で生きてきた彼には物足りないものかもしれないと思った。
　また、顔見知りばかりで構成される村のみんなが、外から来た彼をどう思うのかも心配だった。
　でも、そんな不安は、取り越し苦労だったみたい。
　彼は、日々、村の人と会話をし、笑いあいながら過ごしている。

　村の誰かが開墾をしたいと言えば、彼は、一緒に下見に行って、測量をしたり、図面を引いたりしているし、水路の流れが悪ければ、村の人と一緒に整備にもいく。
　子どもたちに、読み書きや計算を教えてほしいと頼まれれば引き受け、簡単な身のこなしや剣の使い方も教える。
　獣用の罠を器用に作って、森の中に仕掛けにいったり。

　先生と一緒に旅をしていたときに、身の回りのことや野営の仕方など、一通りのことは教わったと、彼は言っていた。
　「昔、魔王軍で兵站確保の際に、兵糧をどう調達して運搬するのか、検討して実行したことが何度もあった。どんな経験でも役に立つのだな。」
　彼はそう言って、照れ臭そうに笑った。

　もともと戦うことに長けていた彼ではあったが、それ以外の分野でも、何でもできる人なのだが、彼は、自分ではそれがわかっていない。
　地上の文字も魔族の文字も読めて、熟読しただけで恩師の残した書物を暗記できるような知力があるのだが、そこまでできる人はほとんどいないのだということを彼は知らない。

それでも、これまでに得た経験や知識が村の人たちの役に立っていることを、少しずつ、彼が実感できているようで、私も嬉しくなった。

　そんな彼を見て、村の人がつぶやいた。
「ロカが帰ってきたみたいだな・・・。」

　私の亡き父の名。
　その言葉を聞いて、私は、涙があふれるのを止められなかった。
　父がこの村で過ごした年月は長くはない。
　それなのに、若くして亡くなった父のことをこうして思い出してくれる人がいるのだと、私は彼に気づかされた。
　私の頬を涙が伝うのに気付き、村の人は慌てて茶化した。
「ほ、ほら、お前の母さんも、旅に出たと思ったら、戦士の男、連れて帰ってきて。お前も一緒だなって。」
　冗談でごまかしていたが、それ以上の意味があることは、私自身が実感していた。
　村で過ごす彼の背中に、父の面影が重なった。
　似ているところなどほとんどないはずなのに。

　彼には、故郷も家族もなかった。
　私は、ずっと、彼に家族を作ってあげたかった。
　彼の帰れる場所を作りたかった。

　いまはまだ、家族は私たち二人だけど。
　もうすぐ、私たちは、三人になる。

マァム

　彼女の生まれ故郷で暮らすようになり、しばしの時が流れた。

　小さな村ではあったが、村の人は、よそ者であるはずの俺を抵抗もなく受け入れてくれた。
　村人たちの、彼女の母に対する信頼がよほど強いのだろう。

彼女の母が、俺のことを「私の息子よ」と言って紹介してくれたときは、驚いた上に気恥ずかしかったが、正直に言うと・・・やはり嬉しかった。
　俺が村へ溶け込むきっかけを作ってくれた彼女の母には、感謝しかなかった。

　基本的に自給自足の村での暮らしであったが、困りごともよく起きるようで、教えてほしいと言われれば、俺の持てる知識を総動員して対応した。魔法のこと以外は。
　文字の読み書き。
　護身術。
　食料の備蓄の計算や収穫量の推定。
　しばらく戦争はないだろうが、災害などの非常事態への備え。
　そういったことに関しては、皮肉なことに、魔王軍時代に軍を率いた経験が役に立っていた。

　もちろん、俺の素性について、知っている者もいるのだろう。
　だが、村の者は誰もそれを口にはしない。
　魔王軍の元軍団長でもなく、アバンの使徒でもない。
　ただ一人の男として生きていけることが、こんなにも安らぐものだとは思わなかった。

　時折、村での振る舞いに迷うときに、やはりこの村の外から来たという彼女の父のことを思った。
　彼女の父も、俺のように迷ったり悩んだりしたのだろうか。
　だがすぐにその思いを振り払う。
　いや、違うな。
　彼は、明るく快活な男だったと聞いている。
　俺のように迷うことなどなかったのだろう。

　俺は、俺自身が奪った多くの命があったことを、流した血の多さを忘れてはいけない。
　だから、俺は、亡き者たちを思い、その遺族を思い、夜には祈り

をささげる。
　もはや習慣と化した俺の行動に気づいていないはずはないが、彼女は何も言わない。

　亡き者を悼みながら、それでも日々の生活を積み上げる。

　俺が家に戻った時、そこに当たり前のように彼女がいる。
　彼女が帰宅したとき、俺が出迎える。
　そうして、もうじき訪れるであろう、三人目に、二人で語りかける。
　これが家族なのだな、と肌で感じて満たされる。

　その中で、昔、俺のたった一人の家族であり続けてくれた、亡き父を思い出す。

　父さん、俺はもう一度、家族に出会えたようです。

ヒュンケル